

市民の声は まちを揺るがす

千歳市生活学校

殿村美千子 さん
菊地弘子 さん



千歳市生活学校：昭和40年に発足し、ごみ分別や省エネの啓発などの生活課題に取り組んできた市民団体。殿村さん(左)は副委員長、菊地さん(右)は会計を担当。今年、メンバーの高齢化のため活動を終了し、60年に及ぶ歴史に幕を下ろした。



みなさんの活躍
紹介します

——ごみの再利用・資源化に、熱心に取り組まれてきました。
私(殿村さん)が千歳市生活学校に入った昭和53年当時、千歳はごみの分別が今ほど進んでいませんでした。そこで私たちが、市と連携して分類調査をしました。部屋いっぱいに集められたごみ袋の中身を分析して、いかに資源が捨てられているかを調べました。資源が分別されるようになった今、これまでの歩みを振り返ると、生活学校の活動を通して「まちづくりをやっていたんだな」との実感が湧いてきます。
——ごみの分別以外では、どんな活動をされていたのでしょうか。
JR千歳駅のバリアフリー化やバスの低床化の要望活動、市民憲章の普及活動などがあります。ポトルキャップや紙パックの回収も、生活学校の発案からでした。
バスの低床化が進む前、運営委員会が「乗り降りがしにくい」との意見が出ていました。当時の委員長だった大古瀬千代さんが「みんなにアンケートを取りましょ

う」と提案し、その結果を受けてバス会社やタクシー会社の方、市の方々に集まってもらい、意見交換会を開いたりもしました。
旧エスプラザの地下駐車場への連絡通路も最初は無く、「トンネルがあれば外に出ずに済むのに」と、多くの市民が思っていました。ここでもアンケートを取り、大古瀬さんがその結果を持って当時の市長と一緒に北海道防衛局に行き、陳情したこともあります。
バスの低床化やトンネル開通が実現したときには、「市民の声はこんなにもまちを揺るがすんだ」と強く実感しました。
大古瀬さんは、一人で学校に赴いて「空き缶やペットボトルは資源なんだよ」と子どもに教えて回るなど、熱心に活動していました。バイタリテイがあつて、親分肌。厳しさの中にあたたかさを持つ人でした。この人なしで生活学校は成り立たなかったと思います。
——活動が市民生活に浸透している実感はありますか。
ごみステーションを見ると、まだまだ黄色いごみ袋が多いです。白いごみ袋に入れるべきプラが黄色いごみ袋(不燃ごみ)に入っているのを目にするので、「私たちの活動って何だったんだろう」と思うこともあります。
ですが、子どもたちが、キャップや牛乳パックを学校に持ってくることを通してモノを大事にする意識を持ってきているのを見ると、うれしい気持ちにもなります。だから、大人ですよ。大人が自ら分別に取り組み、子どもの手本にならないかと思っています。

第38回

胃がんの治療には、外科的手術、抗がん剤治療、内視鏡治療などがあります。
なかでも早期胃がんには、胃内視鏡(胃カメラ)による治療が多く選択されます。この治療法は、胃の内部から直接がん細胞を切除するため、従来の胃を切除する手術とは異なり、胃を温存できるという利点があります。その結果、身体への負担が少なく、早期退院が可能となり、生活の質(QOL)が保ちやすいことが特徴です。
内視鏡による治療法にはいくつかの種類がありますが、近年では、日本で開発された「粘膜下層剥離術(ESD)」が主に用いられます。ESDは、がん細胞のある粘膜の下に生理食塩水

などを注入して病変を隆起させたうえで、電気メスを使って粘膜下層から広範囲に切除する治療法です。これにより大きな病変の治療が可能となりました。
切除した組織は病理検査が行われ、がんの進行度を調べます。
病理検査でがんが粘膜内にとどまっている「粘膜内がん」と診断された場合は、ESDでの治療は完了となります。しかし、再発や新たながんを早期に見出すため、定期的な胃カメラによる検査が必要です。
いずれにしても、胃がんは自覚症状が出たときはすでに進行していることが多いので、定期的な検診を受け、早期発見・早期治療を心掛けることが大切です。

先生、教えて!



早期胃がんの内視鏡治療について



市立千歳市民病院
診療部長(消化器科担当)
大久保 俊一